

国際シンポジウム

21世紀の多様性と創造性——学術・アート・ファッションにおける新展開

Diversity and Creativity in the 21st Century: New Directions in Science, Art, and Fashion

報告

2019年秋、明治大学情報コミュニケーション学部ジェンダーセンターは設立10周年記念イベントとして国際シンポジウムを開催した。「21世紀の多様性と創造性——学術・アート・ファッションにおける新展開」と題された本シンポジウムは、多様性に肯定的な意味を付与する時代における文化創造について学際的に論じるもので、いかに述べるように二部構成で開催した。

9月20日（金）に開催された第一部「パート1 ジェンダー研究の新展開——この10年と今後」においては、多様性に関する議論をリードしてきた学術領域であるジェンダー研究を取り上げ、近年の新たな研究動向を明らかにし、これまでの到達点と残る課題について議論した。ジェンダー研究を牽引してきた日独の研究者（江原由美子 横浜国立大学教授、イルゼ・レンツ 独ルール大学ボーフム名誉教授）による基調講演により、日本およびヨーロッパの近年の社会変動とそこにみられるジェンダーやそれと関わる差異の問題を確認すると共に新たなジェンダー分析の理論やアプローチが確認された。後半の座談会では、歴史、表象、セクシュアリティ、暴力、身体・スポーツの5つの領域を取り上げ、それぞれに関する最新の理論・実証研究の知見が紹介され、喫緊の課題を可視化すると共にその解決に資する研究のあり方について活発な議論がなされた。

11月14日（木）・15日（金）に開催された第二部「デジタル社会の多様性と創造性——アートとファッションの新展開」においては、多様化に肯定的な意味を付与する動きが社会のデジタル化と同時期に起きていることを踏まえ、領域横断的な越境的創造性がいかにして発揮され、新しいクリエイションが起きるのか、またそこに新たな技術がどのように関わっているのかについて議論が行われた。初日オープニングの基調講演では、創造的営みの実践者（アーティスト、音楽家の渋谷慶一郎氏）による斬新な芸術作品の紹介とそれら作品のコンセプトが提示されると共に、哲学者としてメディア論を専門とする研究者（大黒岳彦 明治大学教授）が、メディア論的・技術論視点から美術の展開を振り返ると共に、アートの意義を示した。続く座談会では、キュレーター（四方幸子氏）に加わっていただき、越境的創造性が発揮される条件について議論が行われた。二日目は、アートとファッションに関するセッションが行われた。いずれにおいても研究者と実践者が登壇し、かつ文理融合の学際的な議論となった。

本シンポジウムと通じて、多様なデジタル社会においていかなる文化と価値を生み出すか、という大きな問いについて学際的かつ実験的に論じる貴重な機会となった。